横浜市立 白根小学校　　学校評価報告書　　（ 令和 7 ～ 9 年度 ）

重点取組分野	令和 7 年度 具体的取組	令和 7 年度 自己評価結果	総括
生きてはたらく知 授業改善 言語能力	①子ども自身が問いをもち、課題解決をできるような単元を設定をする。日々の子どもの振り返りを、授業改善に生かしていく。②教職員や子どもが、話したり書いたりする言葉を大切にして、今の活用できる言語がどのぐらいであるのかを整理する。日常生活や授業を通し、言語能力を育成していく。	①子どもたちに対して「なぜ」、「どうして」などの問いかけを多くして取り組んだ。その結果、回答はできるもののその理由が答えられないことに気付いた子どもたちの考えるという行動につなげることができた。 ②学習を通して、言葉を大切にすることはできた。子どもたちの言語能力が向上したかどうかの見取り方に課題が見られるので、検討していく必要がある。	B
豊かな心 たてわり活動 人権教育	①学年に応じたねらいを意識してたてわり班活動、ペア活動などの異学年交流を行うことにより、自己有用感を高め、社会性や協調性を育てる。②多様な考えを受け止めながら、互いの気持ちを考えた言動をとれるようにする。気持ちを伝えやすい場を設定し、聞き方、伝え方を指導する。	①縦割り活動を通じて、自分と違う考えもあることに気付き、自分より高学年の姿を見ながら、低学年にも優しく接することができていた。協調性を育てることができたと思う。 ②自分の思いをもち、それを適切に伝えることや相手の思いを受け止める大切さを継続して指導してきた。個人差はあるが互いを認め合う雰囲気が広がってきている。	B
健やかな体 体力向上 食育	①運動委員会の活動を充実させ、年間を通して様々な運動に親しめるようにする。体力向上週間を新たに設定し、長距離走や長縄、単縄の練習を行い、体力向上する機会を設定する。②年間計画に基づき食育と教科を関連させて、食について興味・関心を深め、食生活を大切に考えられるようにする。	①長縄などクラスでまとまって練習に取り組むことができた。また、苦手とする児童に対しても周りが声かけなどをしてサポートすることができた。 ②食育に関しては、自分で食べられる量を考えて配膳に向かわせていたので、残量を減らして無駄をなくそうと一人ひとりが考えることができたと思う。	B
自分づくり教育	①児童の様々な活動を適切な時期に評価し、価値づけることで、児童が自分のよさを安心して出せるようにする。②児童が自分自身を見つめ、自分の思いや考えをもち、伝えたり表現したりし合うことで、互いのよさを認め合えるようにする。	①YPなどや道徳などで自分自身のよさについて考えたり、他人に自分の良さを伝えてもらったりすることで自己評価を挙げることができたと思う。また、行事の後しっかり振り返りの時間を取ることで自分自身を見つめる時間とすることができた。	B
いじめへの対応	①未然防止のために、いじめ解決一斉キャンペーンのアンケートやYPアンケートを活用する。そうすることで、児童の悩みや困り感に早期に気付き対応できるようにする。②いじめ防止対策委員会では、早期発見・早期対応・未然防止に繋がるための手立てを具体的に考え、実行する。③児童からのヒアリングや事案の対応には、複数体制で組織的に対応していく。	①児童のアンケートの結果を早い段階で確認し、聞き取りや面談などを通して困り感にすぐに対応できた。 ②いじめ防止対策委員会で、いじめの未然防止のための情報提供や研修を実施した。 ③複数体制での聴き取り体制は継続していく。	B
人材育成・組織運営(働き方)	①メンターチームを組織し、授業研や研修などの活動を継続して行うとともに、中堅職員がアドバイザーとして入り、指導助言できるようにする。②それぞれの経験や得意なことを生かして校務分掌を割り当て、責任をもって仕事を行えるようにする。③授業時数を調整し、放課後の会議や教材研究などの時間を確保する。	①メンターチームでは、授業力の向上を目的とし、指導案検討や授業研を積み重ねた。中堅職員も的確にアドバイスを行った。 ②校務分掌では、一人で抱え込まず声を掛け合って協力して取り組むことができた。 ③時数を調整し、会議や教材研究などの時間を確保した。	B
地域・保護者との連携	①各教科や領域の活動を地域コーディネーターや保護者ボランティアと連携し、児童が地域の一員であることを自覚できるようにする。②学校だよりやホームページ、動画配信などを充実させ、情報発信に努める。③学校運営協議会やゆりのき会との連携を深め、様々な課題を職員と共有できるようにする。	①主に生活科や総合の時間を通して地域の人々や施設、行事などと関わり、地域の一員として意識が高まってきた。②運動会の事前の様子や修学旅行等の説明会を動画配信し、保護者がいつでもくり返し情報を得られるように工夫した。③学校運営協議会やゆりのき会との連携にはまだ課題が残っている。	B
児童理解	①児童の悩みへの早期発見や細やかな支援方法の実施のため、横浜プログラムを積極的に活用し、支援検討会を行う。②SCやSSWとの情報共有や特別支援研修等、他機関との連携を図る。③児童一人一人が自分のよさを発揮し、互いのよさを認め合える関係づくりができる学級経営を目指す。	①YPアンケートは行っているが、横浜プログラムは、学年やクラスによって実施回数に差があるため、もっと計画的に進めていく必要がある。②SCやSSWとの連携は図れている。継続していく。③児童一人一人が縦割り活動や授業を通して、互いの良さを認め合える学級経営や学校行事を行うことができた。	B
a14	a24		
a15	a25		
ブロック内評価後の気付き	上白根北中学校ブロック内では、共通して地域とのつながりが強く様々な活動に協力していただいているということがわかった。しかし、どの学校も教職員の若年化、少数化は課題であることもわかった。そのため学年研だけではなく、ブロック研やペア学年研など情報共有の場を工夫していくことも必要だと感じた。また、入学式の日程（着任式・始業式の翌日に行う案）についてはブロック内でよく検討し、中学校の入学式との兼ね合いも考慮する必要があるということを確認した。		
学校関係者評価	白根小全体の空気感が、とても温かい。先生方が向上心をもって教育活動に取り組んでいて、指導の方向性が子どもたちにも伝わっているのだと感じる。子どもたちが地域と関わって育っていくことは大切なことだが、今後は、様々な活動の中で、一人ひとりの個性がさらに生きるような学校になることを期待している。		
中期取組目標振り返り	本年度は、中期学校経営方針に基づき、各重点分野で計画的に取組を進め、概ね安定した成果を上げることができた。授業改善、児童理解、地域連携など、学校の基盤となる取組については、教師同士の協力体制が進み、児童の姿の変容にも確かな手応えが見られた。一方で、言語能力の育成方法の精査や、地域・保護者との協働の在り方、組織運営面での負担分散など、継続的に改善していくべき課題も明らかになった。次年度に向けては、今年度の気付きと成果を十分に生かしつつ、より実効性の高い取組へとつなげていきたい。		

重点取組分野	令和 8 年度 具体的取組	令和 8 年度 自己評価結果	総括
生きてはたらく知 授業改善 言語能力	①子ども自身が問いをもち、課題解決をできるような単元を設定をする。日々の子どもの振り返りを、授業改善に生かしていく。②教職員や子どもが、話したり書いたりする言葉を大切にして、今の活用できる言語がどのぐらいであるのかを整理する。日常生活や授業を通し、言語能力を育成していく。		
豊かな心 たてわり活動 人権教育	①学年に応じたねらいを意識してたてわり班活動、ペア活動などの異学年交流を行うことにより、他者とのよさや違いを認め合う姿勢を価値づけ、その経験を積み重ねることで、自他の考えを伝え合えるようにする。		
健やかな体 体力向上 食育	①運動委員会の活動を充実させ、年間を通して様々な運動に親しめるようにする。体力向上を目指し、長縄や短縄の練習を行い、運動する機会を設定する。②年間計画に基づき食育と教科を関連させて、食について興味・関心を深め、食生活を大切に考えられるようにする。		
自分づくり教育	①児童の様々な活動を適切な時期に評価し、価値づけることを続ける。さらに学年として定期的にYPを実施し児童の様子を共有する。②自分づくりパスポートなどを活用し、児童が自分自身を振り返る時間を確保するとともに、よさを共有できるように掲示などを工夫する。		
いじめへの対応	①未然防止では、児童へのアンケートやYPを活用する。アンケートは実施するだけではなく、それをもとに児童と個別に面談をすることで困り感に気が付きやすくする。②いじめ防止対策委員会では、全職員が参加する体制にし、全校児童への支援を全職員で行う。③児童からのヒアリングを初期対応に生かし、早期解決に努める。		
人材育成・組織運営(働き方)	①メンターチームを組織し、授業研や研修などの活動を継続して行い、中堅職員がアドバイザーとして指導助言する②職員の経験を生かして校務分掌を割り当てつつ、分掌の枠を超えて声を掛け合って円滑な学校経営を目指す。③授業時数を調整し、放課後の会議や教材研究などの時間を確保する。		
地域・保護者との連携	①生活科や総合的な学習の時間を中心に地域コーディネーターや保護者ボランティアとの連携を深める。②ホームページ、動画配信などの内容を充実させ、情報発信に努める。③学校運営協議会やゆりのき会との連携を深めるために会議の内容を職員に周知する。		
児童理解	①未然防止では、児童へのアンケートやYPを活用する。アンケートは実施するだけではなく、それをもとに児童と個別に面談をすることで困り感に気が付きやすくする。②いじめ防止対策委員会では、全職員が参加する体制にし、全校児童への支援を全職員で行う。③児童からのヒアリングを初期対応に生かし、早期解決に努める。		
a14	b9		
a15	b10		
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			

重点取組分野	令和 9 年度 具体的取組	令和 9 年度 自己評価結果	総括
生きてはたらく知 授業改善 言語能力	c1		
豊かな心 たてわり活動 人権教育	c2		
健やかな体 体力向上 食育	c3		
自分づくり教育	c4		
いじめへの対応	c5		
人材育成・組織運営(働き方)	c6		
地域・保護者との連携	c7		
児童理解	c8		
a14	c9		
a15	c10		
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			